

令和6年度 園評価書

園番号	36	園名	有度北こども園
-----	----	----	---------

I 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心も体も元気な子	「やってみよう！」 「いいね！」がいっぱい	自分の思いや考えを自分なりの方法で表している	自分の思いを表出するためには、そばにいる保育教諭との安心できる関係が大切であることを意識し、スキンシップを図り、一緒に遊ぶ中で、子どもの言葉だけでなく表情や仕草、まなざし、態度、声質から思いを受け止めていった。自己表出の苦手な子には1対1での関わりを行い、子どもの思いや考えが表現できるよう「どうしたい？」「どうだったかな？」などの問いかけを行った。また園内研修で、子どもが表情や目線から思いを表出している姿を見取って話し合うことで、自分では気づけなかった表現に気づく機会となっている	B	A	・やりたいと言葉で伝えなくても、もうすでに遊び出している姿があり、自分の思いや考えを自己表出している子が多いと感じる。自分で選べる素材、用具の準備ができているからである	子どもの思いや考えの表出方法は様々であることをこれからも意識し、保育教諭が子どもにとって安心して思いを出していい存在になれるようスキンシップを図り、思いを認め、褒めを増やしていく。また、園内研修を通して子どもの思いや気づきの見取りを続け、職員間で学び合っていきたい
		身近な人や物と触れ合う中で、自分で決めたり、選んだり、葛藤したり、思いやる体験をしている	まずは子どもの年齢や発達を押さえ、遊ぶ姿からどんなことに興味を持っているか、どんな遊びに繋がっていくか、保育教諭としてどんな経験をさせたいかを話し合い、選択できる素材や玩具、用具を準備し、子どもが手に取りやすい場所に配置している。「かして」「いれて」など思いのぶつかり合いから喧嘩になったり、手が出てしまったりすることもあるが、葛藤体験と捉えて見守り、年齢に合わせた必要な仲立ちを行っている。まだ保育教諭を求める姿も多く、個別の関わりの中で思いを出せるようにしていった	B	A	・既製の玩具で遊ぶだけでなく、子ども達が考えたり試したりしながら遊ぶ姿が、室内でも園庭でも見られている	子どもが自分で選択するためには、まず「楽しそう」「やりたい」と感じられなければならない。子どもと同じ目線で遊びながら、子どもの興味や不思議を捉え、いくつかの素材や用具を準備し、時にはスパイスを加えていく。また保育教諭が率先して片づけ、物を大切に扱う姿を見せ、遊びのしまい方、終わり方も振り返りの中で考えたり、保育教諭自身も葛藤したり、挑戦したり、思いやる優しさを見せたりすることで、子どもに伝えていきたい
		「どうしてだろう」「おもしろい」「やってみたい」と感じながら遊び、達成感や充実感を味わっている	子どもの視線や表情、仕草を見たり、同じ目線になったり、同じ動きで一緒に遊んだりすることで、子どもの楽しさ、不思議さ、面白さ、うまくいかない葛藤の思いを見取ることを意識し、遊び出しの環境や環境の再構成を行った。「どうしたい？」「何かいい方法ある？」と投げかけることで、言葉で思いを伝えたり、遊びがつながっていったりする反面、歳児によっては考えることばかりが続くとやめてしまう場合もあり、達成感までは味わえていないこともある	B	A	・先生達がよくやってくれているので、子ども達も楽しく過ごせている。もっと自己評価を高くしてもよい	子どものそばで同じ目線になり一緒にやってみることで、子どもの思いが見えてくるので、引き続き興味関心を見取することを学んでいきたい。達成感や充実感を感じた終わり方と遊びが持続しなかった終わり方の違いを見極めていきたい。運動会ごっこで年上児に憧れて遊びが続く姿や年下児をかわいがる姿があり、興味を広げるきっかけ作りとしてもっと異年齢交流をしたい

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	一人一人の発達を知り、学年目標を理解して教育保育を進めている	各クラスの室内掲示、週案への記入により、学年目標に向かってねらいを立て教育保育を進めている。月末会議や園内研修で、保育改善資料やこども園教育保育要領を用いて子どもの実態や発達と照らし合わせて、関りや環境を考えたり、振り返りしている	B	B		月末会議での発達の確認や園内研修での発達を押さえてのねらいの検討で子どもの姿の再確認、共通理解ができるので続けていく。リーダー会議、幼児・乳児会議ではクラス会議の報告と共に子どもの発達や成長を語り合う機会にしてい
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	落ち着いた生活リズムの中で一人一人が安心して園生活を送れるよう配慮している	コドモンでの連絡になったが、登園時に保護者と直接コミュニケーションを取りながら健康チェックを行い、体調の変化や家庭での様子、怪我の有無を把握し、職員間で連携を図り、確実に伝達を行っている。また家庭環境や生活リズムの違いに合わせて臨機応変に対応し、クラスだけでなく他クラスやフリー保育者、事務室との連携の中で子ども達が安心して園生活を送れるようにしている	A	A	・毎月、会議を行って話し合いができていることが伝わってくる	長時間保育の過ごし方を定期的に見直し、子どもの前日からの様子や伝達事項の引継ぎの確認を徹底する。保護者とのコミュニケーションは引き続き直接的に丁寧に関わり、家庭環境や関わりの中で配慮が必要な時は担任で抱え込まず、会議等で園全体に周知し、話し合いの中から支援方法を考え共通認識していく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもたちが気づいたり、考えたり、挑戦したりできる用具や素材が準備されている	様々な形や数の自然物を選ぶようにしたり、運動会後すぐに運動会ごっこができるようにしたり、季節や発達など状況に合わせて素材や運動器具を用意し環境を整えている。また、子どもの遊びの実態と環境にズレがあると感じたら、すぐに担任間で話し合い再構成を行っている。リーダー会議、幼児・乳児会議で園庭の使い方を共有している	B	A	・園内研修の様子を見せてもらったが、短い時間の中でも役割を決めたり、ポイントを押さえながら参観し合ったりする姿が多く、職員体制ができている連携が履かれていると思う	子どもの発想や発信を待つだけでなく、保育者が願いを持ち、一緒に遊ぶ中で遊びを予測し、考えたり、仕掛けたりして見通しを持って遊びを広げていく。また自分から発達を学び、教材研究する機会を作る。片づけや整理整頓は声掛けだけでなく、保育者がやってみせることを意識してきたので、引き続き整理された中で遊びだせるようにしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	全職員が災害時に取るべき行動がとれるように、様々な状況を踏まえた訓練をしている	毎月、様々なシチュエーションを想定して訓練を行い、実施後は次月の職員会議で反省課題を共有し、次に活かしている。また南海トラフ巨大地震を想定した訓練では、清水有度第一小学校までの避難を経験することで課題提起ができた	A	A	・毎日の送迎時に、先生方がよく話してくれて園の様子がわかる。また、送迎できない保護者はコドモンの活用が増えたことで、おたよりを読んだり、写真付きのドキュメンテーションを見たりする機会が増え、楽しみにしている。園や先生方の対応をありがたいと思っている保護者は多い	どんなに訓練しても想定外のことが起こることも予測されるため、引き続き職員一人ひとりが役割と責任を持ち、訓練を行っていく。清水有度第一小学校までの避難から、長距離移動での多くの課題提起があり、実態を共有し改善点を考えていく(乳児クラスの避難車の配置台数、ヘルメットから防災頭巾への変更、清水有度第一小学校までの避難訓練回数を増やすなど) ヒヤリハットを書く習慣をつけるために、日誌に欄を作るなど工夫する
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	健康な生活に必要な習慣を子どもや家庭にも日々の生活の中で丁寧に伝えている	手洗い、うがい、身支度など子ども達の年齢に合わせた声掛けや促し、視覚支援、見届け、導線の見直しのもと、子ども達が意識し行動しようとしている。感染症状況を玄関や門に毎日掲示し、保護者に伝えている。毎月19日の食育の日に、季節や行事にちなんだ食育活動を行ったり、栽培した野菜を自分たちで調理して食べたりすることで食への関心が高まり、実物掲示やドキュメンテーションを通して保護者に発信している	A	A		園では引き続き保健習慣が身につくように関わったり、絵本やパネルシアターなどを活用したりして、子ども達が意識できるようにする。園で行ったクッキングや給食の人気メニューのレシピを保護者に伝え、家庭で楽しんでもらえるようにする。また家庭での生活習慣の様子を聞き、園で意識して取り組んでいることや効果的な方法など具体的に知らせ連携を図る
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人に合った支援計画を立案し、全職員で共通理解できるよう会議をしたり、外部講師の助言を保育に活かしたりしている	一人一人に合わせたサポートプランを3か月ごと作成し、保護者面談を行った。外部講師を招いて実際の子どもの姿を見てもらい、いただいたアドバイスを実践に活かすことで子どもの成長につながった。年2回にじの会を開催し、ペアレントメンターの子育て体験談や就学までの具体的な流れの話を聞いたり、保護者同士の交流を図ったりするよい機会となった反面、支援児の活動(ミッキー活動)は支援児の特性が様々であり、活動の進め方が難しく活動回数が少なかった	A	A	・防災対策として、幼稚園は防災頭巾だったが、自分で扱える点が良かった。小学校以上も防災頭巾になるので、ヘルメットの老朽化への対策として考えていったらどうか	引き続きサポートプラン作成時や面談を通して、担任間で共有、報告を行い同じ支援ができるようにし、誰が担当しても対応できるよう全職員が目を通す機会を作る。また自主研修に参加できない職員もいるので、外部講師からの支援方法のアドバイスや学びを全職員に周知していく。回数を増やせるようミッキー活動は内容の見直しを行い、活動内容の掲示をし周知していく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	それぞれの職員の良さを活かした分掌担当が連携をして保育を進めている	正規職員だけでなく会計年度任用職員全員が得意分野を活かして分掌を担当し、園全体で話し合ったり、予定表を事務室に貼って見える化したり、声を掛け合って取り組んだりしている。また月末会議で分掌の進捗状況を報告し、全職員で共有することができている	B	A	・給食の人気レシピを保護者に発信していくのは、とてもいいと思う。食育につながっていく	園全体で取り組む行事では分掌担当の負担が大きいため、担当でなくても業務を分担したり、声を掛けてできることをしたりして連携を図る。会議に出ていない職員への報告は確実にし、会議に出られなかった時は自分から聞くようにする。また正規職員以外が会議に出られるよう時間調整していく
6 研 修	(1)研修体制の充実	「やってみよう」を見つけよう！つなげよう！をテーマに遊び環境を整え、自分の保育を見直したり学びに活用したりしている	定期的なクラス会議や日誌の自己評価にピンクと青のマーカーを引くことで、子どもの遊びの見取りができていたか確認することができた。幼児は翌週の週案を遊び地図にすることで環境の整理がしやすくなっている。研修テーマや手だてを意識することで新しい学びや自分の保育の見直しができ、担任間で子どものかわいい姿を語り合ったり、園内研修で動画を活用したりしたことで、子どもの気づきが共有でき学びが深まっている	B	A	・有度地区連合自治会の定例会に清水第七中学校校長が来られ、中学生を各自治会行事に参加させたいという話があった。職場体験で中学生が来ているようだが、行事でなくてもこども園に来て子どもと触れ合いたい子もいるのではないかと。地域とつながるという面で、今後考えていけることがある	毎週の自己評価をクラス内で10分でも時間を作って話し合うことで、翌週の環境準備や再構成、保育者の願いを共有することができると、意識していくと共に、幼児・乳児・リーダー会議へとつなげていく。園内研修に参加できなかった職員には書面だけでなく、月末会議などで報告する機会を作っていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子どもが選択できる環境を整えるために教材研究をしたり、振り返りを行い必要に応じて変化させたりしている	まず子ども達の遊ぶ姿から興味関心を見取って遊び出しの環境を準備し、遊び方の変化を捉えて、次の遊びの予測を行い、必要な教材、用具、自然物、季節の遊びを考えた。各クラスに制作コーナーを準備したことで、意欲的に行事に取り組む姿が増えた。また子ども達と振り返りを行ったり、子どもの姿を担任間で共有したり、会議で遊びの様子を伝え合ったりして環境の再構成を行っているが、物の扱い方や片づけが乱雑で課題である	B	B		子どもの発達を押さえた環境を考え、教材研究を個人や職員間、子どもを交えて行い、発達に合った遊びや教材、場所など整えていく。振り返りから再構成する中で、遊びの続きや終わり方、とつき棚の扱い方を見直しをタイムリーに行う。また月1回だけでなく、短時間でもリーダー会議、幼児・乳児会議を行い写真など活用しながら話し合う時間を作っていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの遊びや生活の姿を写真を使ったボードやドキュメンテーション、おたよりで知らせ、参観会や面談を通して子どもの育ちや園への理解が深まるようにしている	今年度から外部委託の写真販売と乳児親子ふれあい会開催をし、より園での様子を知らせていった。園だより、クラスだより、クラスボード、季節ごとの遊びの様子、行事のドキュメンテーションに写真を活用することで、遊びの過程を大切にしていることを視覚化して伝えている。また写真を見ながら親子の会話につながっている。懇談会やふれあい会では1年の成長を伝え、子育ての悩みを話し合う機会を作った。必要な保護者とは随時、個人面談を行っている	A	A	・赤ちゃんを抱っこすると、とても温かく、そして重さを感じる。実際、抱っこしてみないとわからない、生きていることや命の大切さが伝わってくる経験となる	コドモンの活用が多くなったが、保護者との直接的なコミュニケーションが大切なので意識して関わり、おたよりなどから連絡や伝達が伝わっていない家庭には個別に対応していく。また保護者の様子に目を向け、普段と違う時には話を聞き、個人面談を行うなど相談しやすい環境作りを行う
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣のこども園の公開保育・小学校の公開授業に正規職員、会計年度任用職員が参加して情報共有したり、小中学生と遊ぶ機会を設けたりし連携を図っている	正規職員、会計年度任用職員フル全員が1回以上他園公開保育、小学校公開授業、幼少連絡協議会に参加し、学びや提案を書面報告だけでなく月末会議で口頭報告し、情報共有している。入学予定小学校3校の交流会への参加、近隣中学校から5名、高校生1名の職場体験、大学生5名の教育保育実習の受け入れを行った	B	B	・評価書からもそうだが、現場を見て、子どもが健やかに育っていることがわかる。先生方は保育にもっと自信をもってい	職員は研修で学んでいるが、子ども達が近隣のこども園や公共施設に行く機会を増やし、直接的な関りや情報収集を行いたい。研修で小学校との連携が必要だと感じたので、自園公開保育や交流会で子ども達の姿を見てもらうだけでなく、遊びの経過や保育者の願いの発信をして、小学校教諭との交流を図っていきたい
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域行事、保育行事への参加から地域と交流し、園だけではできない体験をする機会を設けている	毎月のおはなしの会ほけっと、地域敬老会、勤労感謝訪問、花育教室、テクノブルーへの避難訓練、常葉大学広場への遠足などを通して、地域の方の協力のもと園内ではできない体験をすることができている。おしゃべりサロンでは長崎子育てトークの会と連携を図り、園行事への招待や園児との交流を図ることができた。また乳児親子ふれあい会で長崎自治会館をお借りし、地域を知るきっかけになった。また園見学者を多数受け入れ、園庭開放では外国籍の親子との交流を図った	B	A		引き続きおしゃべりサロンでの園内行事への参加、子育てトークの会との連携、自治会との連携を継続し交流を図っていく。来年度も猛暑になることが予想されるので、春から計画性を持って散歩に行き、地域を知る機会を作るとともに、子ども達が進んで挨拶できるよう、職員が積極的に地域の方に声を掛けていきたい